

「実践と研究との協働の深化 ～マインドとコンピテンシー～」



高知県安芸福祉保健所長兼保健監
高知県保健所長会 会長 福永 一郎

第78回日本公衆衛生学会総会は、高知大学教育研究部医療学系安田誠史教授を学会長に、令和元年10月23日（水）～25日（金）「高知市文化プラザかるぼーと」「ホテル日航高知旭ロイヤル」「高知会館」「高知新聞放送会館」などを会場として開催されました。

総会のテーマ「実践と研究との協働の深化～マインドとコンピテンシー～」は、公衆衛生の領域の実践と研究との間にはまだ距離があり、多くの場合、それぞれでの成果が別々に発信されるだけに留まっているが、実践家と研究者とが協働の深化をめざし、それぞれの立ち位置で大切にすべきマインド（問題認識と価値観に影響する志向）、そして磨きをかけるべきコンピテンシー（知識、技能、態度を統合して活用する能力）を明確にして、実践と研究との協働をめざすもので、実践と研究の共同を目指した多くのプログラムが企画されました。

特別プログラムは、テーマと同じ題名の学会長講演に続き、おそらく総会初となる学会名誉会長の講演となりました特別講演は「日本一の健康長寿県構想について」と題して、尾崎正直高知県知事が、高知県における保健医療福祉課題への取組について熱く語られました。

教育講演は、筆者の講演（「新生児、乳幼児の難聴（きこえ）と地域での保健活動」）を含め4題、シンポジウムはミニシンポジウムも含めて40題設けられました。「マスギャザリングにおける感染症危機管理」「地域における海外からの感染症対策—厚生労働省検疫所と自治体の連携—」「国際化する地域：求められる保健所のグローバル化対応能力」「多文化に対応できる公衆衛生専門家を目指して」「OECD 諸国と比較したわが国の健診・検診の課題と対策」など、グローバル化に伴うさまざまな課題とその対応を扱った結核、健康危機管理に関係した内容、喫緊の課題である改正健康増進法への対応、災害・地域強靱化に関する内容

など、多くの保健医療分野のシンポジウムが開催され、実践と研究の協働の深化が図られたと思います。

「結核集団発生の対策に関する自由集会」は初日に行われ、多くの参加を得て熱心な議論が行われました（詳細は、本誌7ページ『『変わらぬものと変わるもの』～高知での公衆衛生学会自由集会から～』をご参照ください）。最終日には「感染症リスクアセスメント研修会」が行われました。

筆者は、今回の総会実行委員でもありますが、2001年に香川県高松市で開かれた第60回総会にて、総会事務局総責任者をつとめた経験があります。18年前の高松総会に比べると、研究と実践の距離がより近くなり、外国語による発表のセッションが設けられるなど、時代とともにわが国の公衆衛生が変遷してきたことを感じます。また、結核研究所にもご出展いただいた地方自治体や大学・団体などによる企画展示は、第60回総会記念企画として高松総会から始まり、以降連綿と受け継がれて発展していることに一種の感動を覚えました。

新幹線が通っていない四国の中でも一番遠い場所での開催であり、ことに東日本では豪雨災害による対応で大変な中でありましたが、約3,400名と多くの方に高知の地にお越しいただいたこと、深謝申し上げます。🐾



総会風景（企画展示）